

公務災害防止事業の推進

▶ 安全管理セミナー及びS-KYT研修を実施して ◀

神戸市消防協会

1. はじめに

神戸市は市域面積約533平方キロメートル、日本の市で6番目の人口153万人を擁する政令指定都市です。

神戸市には、六甲山や瀬戸内海の豊かな自然、美しい景観の港、異国情緒あふれる街並み、日本最古の温泉である有馬温泉、灘の酒蔵など、魅力的な観光資源が多くあります。

神戸市の市制が施行された明治22(1889)年よりも早い慶応3(1868)年に開港した神戸港は、平成29年1月1日に開港150年を迎えました。



神戸市の中心地にある旧居留地には、開港以来多くの外国人たちが居住し、商売を営みました。今でもレトロなビルが多く建っていて、街を歩けば当時の面影を感じることが出来ます。また、来日外国人の増加による居留地の用地不足を補うため、北野地域には多くの洋館が建てられ、今でも異人館街としてにぎわい、多くの観光客を迎えています。

2. 神戸の災害

阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震災害等の地震災害や大型化する台風や集中豪雨による風水害が全国で多発しています。

本市は「神戸といえば水害」と言われるほど過去から水害や土砂災害に見舞われやすいまちでした。

神戸市街のすぐ北側に屏風のようにそびえる六甲山地は神戸市のシンボルとして美しい景観と豊かな自然の恵を与えてっていますが、マサ土と呼ばれる風化した花崗岩に覆われているため、山崩れや土石流が発生しやすい地形的特徴があります。

1938年(昭和13年)の阪神大水害や1961年(昭和36年)、1967年(昭和42年)の豪雨災害では、大規模な山崩れや土石流、河川氾濫が発生し、多くの市民が犠牲になりました。

これらの災害を踏まえ、六甲山には500基を超える砂防ダムの建設や、谷あいの浸食や土砂流出を防ぐ工事などの事業が行われてきましたが、昨年8月の台風11号の際には、雨量が多かった六甲山地の北東側(裏六甲地域)に崩壊が集中し、一部地域で避難指示を行う状況となりました。

現在、市内には約2,200箇所土砂災害警戒区域や浸水が想定される河川が多く存在しているほか、沿岸部の高潮対策など、警戒すべき災害事象も多種多様であるため、ハード面の対策だけでは被害を完全に防ぐことはできず、災害の大規模化傾向を踏まえ、消防団や自主防災組織

の活性化などの施策の充実を図っていかねばなりません。

3. 神戸市の消防団

神戸市の消防団は昭和22年の11月に発足し、現在は市の9つの行政区に1ないし2の消防団が置かれており、10消防団、15支団、160分団、162班、全消防団員の定員は4,000名です。

各消防団は区域の広さや地理的条件、歴史的経緯などにより、活動の内容や装備に差異はありますが、災害時には区域を超えて互いに消防力を補完し合うという考え方の元に連携協力し活動を行っています。

4. 安全管理セミナー及びS-KYT研修開催の経緯

神戸市においては「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」の施行により、平成27年度からこれまで行っていた消防団幹部教育を見直すこととなり、その際、消防団の安全管理の重要性を再確認し、平成27年度にあつては「安全管理セミナー」、平成28年度にあつては「安全管理セミナー」(2回)と「S-KYT研修」を開催する運びとなりました。

5. 研修を受講して

安全管理セミナーについては、参加した団員も研修開始時や、指差し呼称の際など始めは少し照れもありましたが時間が経つにつれ、真剣な表情で講師の方々の話を聞き、安全管理の意識を高め、団幹部としての心構えを再認識することができました。

S-KYT研修終了後のアンケートでは、「レポート作成にあたり初対面にも関わらず、他の団員と輪になり、危険予知シートを題材に多くの意見がどんどん出てきて、不思議なほどに一

体感のある研修だと思った」「今までになかった発想で、危険事象に対する意識が変わった」などの意見が上がり非常に有意義な研修でありました。

また、受講した団員から「自らが所属する消防団に持ち帰り、他の団員にも教えていきたい」との声が多く、これらの研修で学んだことが当市の消防団に浸透し、「安全・確実・迅速」な消防活動を通じ「安全安心都市こうべ」を目指して行きたいと思います。

最後になりましたが、この度の研修開催にご協力いただきました、講師の皆様、消防基金の方々に心より感謝申し上げます。

